

補助講演①

「人新世」時代の新たな自然観をめざして

龍谷大学社会学部・教授 里山学研究センター・センター長
村澤真保呂

【要旨】

「人新世」とは2000年に気候学者クルツェンと生物学者ストーマーが提唱した概念で、人間が自然環境に取り返しのつかない不可逆的な影響を与えるようになった地質年代を指すものである。本研究センターでは、そのような時代認識を背景として、昨年度から「〈人新世〉時代の新・里山学の創造—新たな〈自然〉概念構築と〈自然との対話〉方法論の確立に向けた文理融合研究」のプロジェクトに取り組んでおり、これまでの持続不可能な自然と人間の関係を問い直し、持続可能な新たな関係のあり方を模索している。

それと同じ観点から、2017年にIPBES（生物多様性及び生態系サービスに関する政府間科学政策プラットフォーム）は、これまでの「生態系サービス（ES）」概念に代えて「自然の人間に対する寄与（NCP）」概念の使用を提唱した。この提唱の背景には ①科学者と政府主導の環境政策が現地の人々の自発性を損ね、機能しない点 ②生態系サービスという概念に含まれる道具的自然観への伝統的価値観からの反発 ③現地のローカルな文化的自然観を理解するために人文学（とくに文化人類学）的知見の導入…などが挙げられる。

ここで重要なのは、従来の科学的自然観を量的＝科学的に捉える「一般的観点」として保持しつつ、新たに伝統的自然観を質的＝人文的に捉える「文脈依存的観点」として、両観点を融合する方向を目指す点にある。それは科学的自然観の限界を示すとともに、伝統的自然観とのあいだに優劣を認めない点で、これから必要な自然観の変革の方向性をよく表しており、それは今後の学術界にとって大きな課題となることが予想される。というのも自然環境問題は、たんに自然領域だけで生じるのではなく、人間の社会制度や精神的価値などと結びついて生じている。つまり自然だけ、社会だけ、文化だけを独立して保護することはできない。したがって従来の自然科学／社会科学／人文科学の「縦割り」の壁を乗り越え、「文化」の領域も含む学際的研究の必要性がますます高まっている。今回のシンポジウムは、そのような学際研究の可能性を探究するものである。